地産地消の広場／顔の見える「市」をつくる

谷口吉光（秋田県立大学）

「先生、イーストモールを改装するにあたり、道の駅風のコーナーを新設したいんだが、いいアイデアがないでしょうか」

昨年暮れ、タカヤナギの高柳恭侑社長から相談を受けた。近くに大型ショッピングセンターがオープンするので、旗艦店舗であるイーストモールを改装しようというのだ。通常の売り場に加えて、すでに常設の農産物直売所を新設することが決まっていたが、ほかに何か目玉になるものがないかという相談だった。

とっさに頭に浮かんだのは、「私たちが野菜や加工品を作っても、売る場所がないんだ」という切実な農家の声だった。県内にはユニークな農産物や加工品を作っている人がたくさんいるが、売る場所がないために知られてない場合が多い。

農業に元気がない理由はいろいろあるが、最大の理由は農家が作った農産物を農家自身が売ることができないことだ。農協が農家から農産物を集め、卸売市場などに販売する、いわゆる「系統出荷」が主流だったため、農家が直接消費者に販売する道は長い間閉ざされていた。最近は直売所があちこちにできて状況はいくらか改善されたが、農家が自主販売する機会はまだまだ限られている。

「イーストモールの一部を、売る場所を求めている地元の農家や加工業者に開放して、彼らが自由に販売できる『広場』を作ったら、生産者だけでなく、消費者やタカヤナギにもメリットがあるのではないか」。そんな考えが浮かんだ。

何も目新しいアイデアではない。昔盛んだった「市（いち）」を復活させたらどうかと考えたのだ。市では、農家は自分の作った農産物を直接お客に説明しながら販売できる。値段だってある程度自分で決められる。お客は地元の農産物を、生産者の顔を見ながら、説明を聞き、納得して買うことができる。そして、そんな市が繁盛してお客が増えれば、タカヤナギの売上増にもつながるだろう。

そんな着想を「地産地消の広場」と名づけて提案したところ、幸い採用してもらうことができた。

その後、地産地消に取り組む県内の生産者団体などに「広場」への出展参加を募ったら、うれしいことに、ほとんどの団体から参加したいという返事が寄せられた。農家、食品加工業者や有機農業者だけではない。地元の大曲農業高校は生徒が作った農産加工品を販売するために参加することになった。こうした場所を求めている人がたくさんいることが改めて証明された。

イーストモールは7月に改装オープンされ、「広場」での販売は9月6日に第1回「みんなの収穫祭」と銘うって開催する。県南の新しい地産地消の拠点として大きく発展していくことを願っている。

（朝日新聞「あきた時評」　2008年9月3日掲載分を加筆・修正した）